

目的がはっきりしたことが成長

今週から、花の苗の植え替え作業が生徒たちの手で行われています。一学期に引き続いて、生徒たちが考えた地域に花を贈るプロジェクトです。昼休みになると、「そよかぜの森(中庭)」から、土に触れた生徒たちの楽しそうな声が聞こえてきます。

二学期は一つの班が一鉢担当できるように、生徒会執行部が九十株の花の苗を準備しました。鉢植えの数や携わる生徒の人数だけでなく、鉢植えを受け取る地域の人たちの笑顔も、一学期を大きく上回ることでしよう。

昨年度の大杉再生支援への協力と、今年度の「プロジェクトf」には、生徒会活動を進める上での大きな成長があると考えています。現在取り組んでいる「プロジェクトf2」にも、一学期のプロジェクト以上の成長があり、私は生徒たちを大変頼もしく感じています。アルミ缶回収については、統合前の旧三校でも取り組んでいました。そして、統合した北中においても、生徒会執行部は引き続きそれを継承することになりました。開校一年目は、アルミ缶回収の収益金で、校区の園に絵本をプレゼントしました。

これだけ聞くと、アルミ缶を回収して、それを換金し、地域に貢献することは例年やっていることで変わりないと思うかもしれませんが、しかし、明らかに令和二年度から違ってきているところがあります。その違いこそが、生徒会活動の本質だと私は思います。

その違いとは……「目的」がはっきりしているということと、令和元年度にも「地域に貢献する」という目的はありません。しかし、どちらかというところ、アルミ缶を集めることが目的になっていたように感じました。したがって、収益金の使い道、つまり、「地域にどのように貢献するか」ということは、収益金を得てからの問題でした。

「大杉の再生支援のために」、「地域に花を贈るために」、そして、「より多くの花を贈って、より多くの人を笑顔にするために」というのが、この二年間のアルミ缶回収の目的の推移です。その変化の中に、生徒たちの意思が徐々に色濃く反映されていることがすばらしいと私は思います。

「仏像作って、魂入れず」という言葉があります。「形」を作るだけで「思い」がないということと、元年度にも「思い」がありました。ただ、その「思い」が後付けであった点(収益金をどのように地域に貢献に使うか)が課題でした。現在の北中のアルミ缶回収には、強い「思い」が入っています。もちろん、アルミ缶回収という形もしっかりとできています。今後、アルミ缶回収という「形」と、それに込める「思い」が、どのように発展していくかとても楽しみです。

(九月十日 記)

